

## 「だもの」という表現について

山口 豊  
(武庫川女子大学文学部教育学科)

## On the expression “damono”

Yutaka Yamaguchi

*Department of Educations, School of Letters  
Mukogawa Women's University, Nishinimiya 663-8558, Japan*

## Abstract

In this article, I consider whether the Japanese expression 「だもの」(damono) used in the works of the poet Aida Mitsuo consists of one word or two words. Generally, the expression is regarded as having two words and is used to express feelings such as reason or dissatisfaction, and things taken as a matter of course. However, the phrase not only encompasses reasons, dissatisfaction, and things taken as a matter of course, but also expresses unique nuances to be taken separately. Therefore, when considering its strong character, especially when used colloquially, I argue that it is better to consider damono as one word.

## 1. はじめに

「つまづいたって／いいじゃないか／人間だもの」

これは詩人相田みつをの代表的な作品であり、『にんげんだもの』という詩集のタイトルにもなっている有名なフレーズである。この詩は深い人間愛と包容力を読む人に感じさせ、勇気づけられる詩として大変有名である。

この詩は形式的には「口語自由詩」である。口語であるだけに語り掛けるような口調や口語特有の表現を持つ詩であるといえる。

ところで、この「人間だもの」という部分を文節で区切れば、当然一つの文節として捉えることになるのだが、しいて品詞分解するとすればどのようなのだろうか。「人間／だもの」と二語とするべきか、それとも「人間／だ／もの」と三語とするべきだろうか。

そこで、文語から口語まで幅のある日本語表現の中で「だもの」という語の位置づけを確認したい。そのために国語辞典を手掛かりに時代別の小説やその他の活字資料を検討材料にすることとする。

また、作者である相田みつをは「だもの」という表現をどのようにとらえていたのかということも視野に入れて論じてみたい。

## 2. 国語辞典における「だもの」の扱い

相田みつをの代表作ともいえる「つまづいたって いいじゃないか 人間だもの」という短い一文の中にも口語の特色がふんだんに表れている。

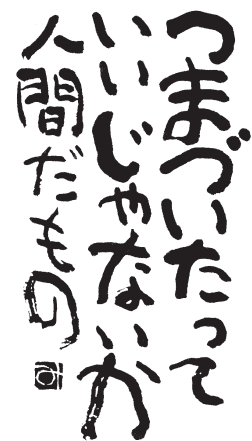


図1 ©相田みつを美術館

その一つが口語にみられる特徴のうちの一つである「融合」である。「融合」とは、品詞の一つではなく、いくつかの品詞の語が一つの意味を持った集合体として個々の品詞として扱うより一まとまりの表現として扱われるものである。

例えば過去の助動詞「た」+格助詞「と」+接続助詞「て」からなる「たとて」は、口語では「たって」となる。

文語例 お前みたやうのが百人中間に有たとて少とも嬉しい事は無い、着きたい方へ何方へでも着きねへ、己れは人は頼まない(樋口一葉『たけくらべ』)

口語例 「泣いておどかしたって駄目だよ」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような憎みきったような大きな声で言って(有島武郎『一房の葡萄』)

また、断定の助動詞「だ」の連用形「で」+係助詞「は」からなる「では」は、口語では「じゃ(じゃあ)」となる。

文語例 お寄りといつたら寄つても宜いではないか(樋口一葉『にぎりえ』)

口語例 何故って、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか(梶井基次郎『桜の樹の下には』)

助動詞との接続だけでなく、助詞同士でも同じようなことが見られる。接続助詞「て」+係助詞「は」からなる「ては」は、口語では「ちゃ(ちゃあ)」となる。

文語例 七歳と云う名を聞ては山抜け雪流より恐ろしくおぞ毛ふるって思い止れば(幸田露伴『風流伝』)

口語例 アノ何時か、気が弱くっちゃア主義の実行は到底覚束ないと仰しゃったのは何人だッけ(二葉亭四迷『浮雲』)

山田洋二監督の名作『フーテンの寅さん』で寅さんを演じる渥美清の「それを言っちゃあおしめえよ」という有名な台詞もこうした表現が口語では多く用いられていることを示している。

なお、口語における融合の種類については松村明が、①助詞とそれに先立つ語との融合 ②助詞と助詞との融合 ③助詞とそれに続く語との融合に分けてそれぞれ例を挙げている<sup>1)</sup>。

こうした口語の特色があるなかで、「だもの」という語は話者の意思を表す表現として文語には見られない表現であり、口語の特色あるものとして考えられる。

では、冒頭で述べたように、「だもの」はどのようにとらえるのが妥当か、「だ+もの」として個々に分けてとらえるのが妥当かということについて考えてみたい。

まず手始めに各社の国語辞典ではどのように扱われているのかということについて確認することとした。その結果、手元にある各出版社の国語辞典では、「だもの」は次のように記載されていた。

出版社名	国語辞典名	見出し語	解説
岩波書店	広辞苑	×	断定の助動詞「だ」+形式名詞「もの」
三省堂	大辞林	×	断定の助動詞「だ」+接続助詞「もの」
小学館	国語大辞典	×	断定の助動詞「だ」+終助詞「もの」
新潮社	新潮国語辞典	○	連語「だもの」(断定の助動詞「だ」に終助詞「もの」の付いた形)
角川書店	角川国語大辞典	×	断定の助動詞「だ」+名詞・終助詞的「もの」
集英社	国語辞典	×	断定の助動詞「だ」+終助詞「もの」
学研	現代国語辞典	×	断定の助動詞「だ」+終助詞「もの」
大修館書店	明鏡国語辞典	×	断定の助動詞「だ」+終助詞「もの」
中教出版	例解国語辞典	×	断定の助動詞「だ」+助詞「もの」

表1 各社国語辞典における「だもの」の扱い一覧

ちなみに「もの」は各辞典では次のように解説されている。

(岩波書店)「広辞苑 第七版」(形式名詞)①そうあって当然のこと。徒然草「あまりに興あらんとする事は、必ずあいなき一なり」。「親には従う一だ」「悲しい時は泣く一」②感嘆の意。万一五「ほととぎす物思ふ時に鳴くべき一か」。「ばかなことをした一だ」③(終助詞的に)少し感情をこめて理由をのべる。「行きたいんだ一」

(三省堂)「大辞林 新装第二版」[形式名詞「もの」から](終助)活用語の終止形に付く。①不満・うらみ・あまえ・訴えなどの気持ちを込めて、理由を述べる。「だもの・ですもの」の形をとることが多い。「だって、仕方がないんです一」「どうしてもぼく行きたい一」②(「ものね」「ものな」などの形で)理由を表す。「ね」「な」などによって、軽い詠嘆の意が加わる。「なるほど、それは君の専門だ一な」「よくわかりでしょう。前に行ったことがあります一ね」(接助)活用語の終止形に付く。①理由・原因を述べる。から。ので。「子供だ一、無理はないよ」「いっしょうけんめい勉強しています一、大丈夫ですわ」②逆接条件を表す。のに。「ぼくだって知らない一、きみが知っているはずがない」(「もの(物)」の形式名詞的用法の一つとして、活用語の連体形を受けて文を終止し、感動の気持ちを表すということはすでに上代からあり、これから終助詞的用法が生まれたのであるが、それは近世以降のことである)

(小学館)「国語大辞典」[終助](㊦㊧のような形式名詞的用法、特に㊦の用法などからさらに進んだもの)終止した文に付加して、不満の意をこめて反論したり。甘えの気持ちをもって自分の意思を主張する。主として婦人・子どもの表現。\*浄瑠璃・嬬山姥 - 燈籠「アア誠さふじゃ物、なう判官殿」\*歌舞伎・お染久松色読販一序幕「それでもどうか恥づかしい物、モン、ほんの事かへ」\*吾輩は猫である《夏目漱石》二「明るく日はとても働けませんもの」\*童謡・胡桃《サトウハチロー》「わたしはなきむしなんですもの」

(新潮社)「改訂新潮国語辞典 一現代語・古語一 第二版」(助)(形式名詞「もの」の転)㊦終助詞。気持ちをこめて、理由を述べる。「うれしや、命にかへての男ぢや一 [五人女三]」「だってくやしいんです一」

(角川書店)「角川国語大辞典」㊧[終助詞的に用いて]①不満・不平の意を表す。「だって惜しいんです一」②〇古「…のに」の意を添える。[天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び帰る一] [万・五・八七六]

(集英社)「国語辞典 第3版」[助](一)終助詞。(活用語の終止形に下接する)口頭語として「もん」ともいう。相手の発言に反駁し(したがって、「だって」「でも」などの接続詞を伴っていることも多い)、本来の自分の主張に理由をつけて説明する意味を構成する。訴え・甘え、あるいは不平不満の感情が込められる。「だって、知らなかったんです一」「命をかけた恋じゃ一」「わたしの勝手だもん」(二)接続助詞。本来の主張を後続させる形式で、順接、理由を表す。「女です一恋をする」「忙しいんだ一、行けないよ」  
▽「もん」といえば、時にぞんざいな、時に、より甘えた語感になる。形式名詞「もの」からの成立。「もので」「ものか」という接続助詞の場合には、「残念なものか」「静かなもので」のように、形容動詞や「だ」の場合に顕著なごとく、連体形が上接する。

(学研)「現代新国語辞典 改訂第六版」《終助詞》(形式名詞「もの」が文末で使われて助詞化したもの)《活用語の終止形、特に「(ん)だ」「(ん)です」「ます」につく。口頭語で、主に女性が使う。くだけた言い方では「もん」とも》話し手が、自分の態度・判断に対して事態や理由をあげて説明するのに使う。

[多く「だって」「でも」と呼応し、(甘えた態度での)反駁の気持ちがこもる]「だって、いじめるんだもん」「でも、私は信じていますもの」[接続助詞的にも使い、その場合は当然の理由をあげる意となる]「冗談ばかりおっしゃるんですもの、困りますわ」

(大修館書店)「明鏡国語辞典 第二版」[終助]理由を述べる。「でも、食べたくないんですもの」「そう言われたって退屈だもの」▽形式名詞「もの」から。「ですもの」「ますもの」など丁寧語に付ける形は、主に女性が使う。くだけた言い方では「もん」とも。「あんな所、行きたくないもん」語法(1)活用語の終止形に付く。(2)接続助詞的にも使う。「まだ子供だもの、無理ですよ」表現反駁や訴えなどの気持ちがこもることも多い。また、終助詞「な」「ね」が付くと、相手と同調する気持ちが伴う。「今日をよく働いたものな」「この辺りは冬が厳しいですものね」

(中教出版)「例解国語辞典 第四〇版」感動を表わす助詞]文の終りに付けて、理由を示し、また訴えたり甘えたりする気持を表わす。「だって[でも]、こわいんだー」「ほんとにくやしかったのですー」

このように圧倒的に二語とする辞書が多く、一語として見出しを立てているのは新潮社のものだけであった。ただし、新潮社も複数の国語辞典を出版しており、二語としている別の辞典もある。

また、上記の辞書の記述をもとに意味による分類を行うと次のようになる。

	岩波書店	三省堂	小学館	新潮社	角川書店	集英社	学研	大修館書店	中教出版
当然	○								
感嘆	○	○							
理由	○	○		○		○	○	○	○
不満		○	○		○	○			
恨み		○							
甘え		○	○			○			○
訴え		○				○		○	○
原因		○							
反駁						○	○	○	
同調								○	

表2 各社国語辞典における「だもの」の意味分類一覧

### 3. 「だもの」という表現に込められた思いについて

多くの辞書がそうであるように、「だもの」は断定の助動詞「だ」と形式名詞「もの」から転じた終助詞「もの」であることは間違いない。なぜなら、断定の助動詞「だ」は方言などにみられる他の表現形式、例えば「じゃ」「や」に置き換えることが可能だからである。また、「もの」はしばしば「もん」という形で用いられることもある。

- ・やもの 大阪弁のおっちゃんやもんねエ (田辺聖子『薔薇の雨』)
- ・だもん おめあのポスター見だが? 本読んでだもん、みろばや(佐藤亮一編『都道府県別全国方言辞典』)

このように各パーツが別の語に置き換えられるということは、その結合力が絶対的なものではなく、ゆるやかな結合をしていることを示していると考えられる。

また、「だもの」という形はとっているが、本来は断定の助動詞「だ」の連体形「な」、または形容動詞の

連体形+「もの」である例が見られる。

- ・新参者のくせに、殿様のお気に入りだものだから、此の節では増長して大層お羽振が宜いよ(三遊亭円朝「怪談牡丹灯籠」)
- ・其の上私は剣術が極下手だもの(三遊亭円朝「怪談牡丹灯籠」)
- ・ちょっと出ますんでございますが、つい無人だもので(夏目漱石『虞美人草』)

さらには「～んだもの」という表現との違いについても考えなければならない。「～んだもの」の「ん」は準体助詞の「の」が音変化したものである。したがってもとは「～のだもの」であるから「のだ」+「もの」であることは明白である。

- ・困ったって仕方がない、どうせいつか困るんだもの。(夏目漱石『虞美人草』)
- ・僕といっしょに汽車に乗っているながら、まるであんな女の子とばかり談しているんだもの。(宮澤賢治『銀河鉄道の夜』)
- ・みんなが、ほねなしってわらうんだもの(あまきみこ「おしゃべりくらげ」)

しかし、もともとはそうであったのだろうが、「だ」と「もの」とを切り離しては「だもの」の持つニュアンスは生まれてこない。

「だもの」を理由を表す語としてとらえ、類似表現の「だから」に置き換えられるかと言えばそうではない。「人間だもの」と「人間だから」とでは表現者の思いは違ってくる。「人間だから」と言うと、人間とつまづきとの間にはなんらかの因果関係がある事を想起させ、論理的に割り切った感がある。対象を注奥突き放して試しているような印象を与えるのに対し、「人間だもの」という表現には因果関係や理屈ではなく、開き直った感を暗示させるとともに、対象に寄り添う印象を与えるように思える。

このことからやはり「だもの」から生まれる表現として「だもの」は切り離すことはできなくなっていると考えられるのである。

言文一致文体の確立に苦心したことで有名な二葉亭四迷は『浮雲』の中で、15か所にわたって「だもの」という表現を用いており、そのうちの7例が「だものを」という形をとっている。

- ・そうだろうてネ、可愛い息子さんの側へ来るんだものヲ。
- ・だから母親さんは厭ヨ、些とばかりお酒に酔うと直に親子の差合いもなくそんな事をお言いだものヲ
- ・二十三にも成って母親さん一人さえ楽に養う事が出来ないんだものヲ。
- ・そんなに思ってるとこだものヲ、お前さんが御免にお成りだと聞いちゃア私は愉快はしないよ
- ・身から出た錆だもの、些とは塞ぐも好のサ。
- ・だって人をお疑りだものヲ。
- ・手は二本きりかと思つたらこれだもの、油断も隙もなりゃしない」
- ・『クラス』の順番で定めると云うんだもの、
- ・本田さんが巫山戯て巫山戯て仕様がなないんだもの」ト鼻を鳴らした。
- ・これだもの……大切なお客様を置去りにしておいて
- ・何故と云って、貴君に凌辱されたんだもの
- ・だって私ア、モウ文さんの顔を見るのも厭だもの。
- ・呼んでも呼んでも、返答もしないんだものを
- ・そらそら、それだもの、だから鰻男だということさ。
- ・それでも睡いんだものを」と睡そうに分疏をいう。

「ものを」という接続助詞は、不満・残念の意を表す語として古くから用いられている。



- ・例の、心なしの、かかるわざをして、さいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。鳥などもこそ見つけくれ(『源氏物語』「若紫」)

接続助詞「ものを」が断定の助動詞「だ」と結びついて「だものを」ということばができ、「ものを」の持つ不満、残念、理由、詠嘆などの意味が「を」が落ちて「もの」となってもそのまま残ったのだろう。

また、「だもの」は話者として女性や子供の会話の中に用いられることが多い。

- ・和田の叔父さまが、いい所だとおっしゃるのだもの。私は、このまま、眼をつぶってそのお家へ移って行っても、いいような気がする(太宰治 『斜陽』)
- ・花の美しさを見つけたのは、人間だし、花を愛するのも人間だもの。(太宰治 『女生徒』)
- ・もう我慢が出来ないわ。寒いし、着物は濡れてるし、お腹は死にそうに空いているんだもの。死ぬにきまつてるわ。(菊池寛 『小公女』)
- ・ほんとに、昨日のようにびっくりしたことはない。お母さんがあんな危ないことをするんだもの。炭俵に火なぞをつけて、あんな垣根の方へ投げてやるんだもの。わたしは、はらはらして見ていたぞい。(島崎藤村 『ある女の生涯』)
- ・「あら、いやだよ。この牛は。かじやのふいごのように、ふうふう、いうんだもの」と、およしばあさんはいいました。(新美南吉 『和太郎さんと牛』)

これは「だもの」ということばの持つ一種の甘えにも似た割り切れない思いがこの表現からは漂ってくるからではないだろうか。

#### 4. 相田みつをの「だもの」という表現

相田みつをは大正13(1924)年に栃木県に生まれ、短歌と書に熱中し、期待の若手書家として活躍していた。その後自分らしい作風を追い求め、長文の詩から抽出していった言葉を口語体で、それも独特の書体で表現することに苦心したという<sup>2)</sup>。

すっかり相田みつをの代名詞のようにもなった「人間だもの」という詩も多くの人々の共感呼び、今なお根強い人気となっている。

もちろん、彼だけが使用した表現ではないことはいまでもない。昭和46年に放映され、大ヒットとなったテレビアニメ「アタックNo.1」の主題歌には「苦しくたって、悲しくたって、コートの中では平気だもん」というフレーズや「だって女の子だもん」というフレーズが登場する。また、昭和46年の大ヒット曲であった南沙織の「17才」という曲にも「好きなんだもの」というフレーズが繰り返し使用されていることから多くの人たちに受け入れられていたことがわかる。

相田みつをが「つまづいたって いいじゃないか 人間だもの」という詩を書いたのは昭和50年代であり、文化出版局から出版したのが昭和59年のことであるから、この頃はこうした表現が好まれていたのかもしれない。しかし、相田みつをは単なるブームにのってこの語を用いたとは思えない。詩人であり書家でもあった彼の感性に基づいてことばの海の中からこのことばを選択したはずだからである。では、その感性とはどのようなものであったのだろうか。

相田みつをは人間をそのままに見ようとし、人間の弱さを肯定的に考えていた。彼の多くの作品からはそのことが伝わってくる。

- ・弱きもの人間／欲ふかきもの／にんげん／偽り多きもの、にんげん／そして人間の／わたし(「弱きもの人間」)
- ・強がりなんか／いうことないよ／やせがまんなど／することないよ／だれにえんりよが／いるもんか／声をかぎりに／泣くがいい／ただひたすらに／泣けばいい(「泣」)

また彼は他の作品においても「～だもの」ということばを用いて詩を書いている。

- ・つまづいたり／ころんだり／するほうが／自然なんだな／人間だもの(「七転八倒」)
- ・ぐちをこぼしたって／いいがな／弱音を吐いたって／いいがな／人間だもの／たまには涙を／みせたって／いいがな／生きているんだ／もの(「ぐち」)

また、彼が書いた作品には「にんげんだ／もの」と改行したものと「人間だもの」と分けずに書いているものがあり<sup>3)</sup>、相田みつを自身はとくにこだわっていないようである。もちろん、これらは一つの書としての作品としてのバランスを重んじた結果であることから一概にはいえないと考えられる。

しかし、彼にとって「だもの」ということばの持つ響きは、単なる「だ」+「もの」などではなく、当然そうあってもいい、許されることとして温かく包み込む感覚を大切にされた結果なのだろうと推測される。論理的に理由を述べたり、自分の意にそぐわないことを示す表現から、人間の弱さを肯定し、励まそうとする思いがこの言葉から感じ取れないだろうか。

仮に「つまづいたって いいじゃないか 人間ですもの」という表現であったとすればどうだろうか。この場合は「です」という言い切りの表現が、「人間」であるから当然だという正当性をより強く打ち出し、やや突き放したような印象を受ける。

一方、「つまづいたって いいじゃないか 人間だもの」という表現は「人間ですもの」に比べて当然性や正当性の主張は低く、相手に寄り添う気持ちが強く感じられる。「ですもの」という表現は「つまづく」ことへの肯定に重点があるのに対し、「だもの」という表現は「人間」であることに重点が置かれている。したがって、彼にとって「だもの」という表現は、他の表現には置き換えられない表現であったに違いない。

それゆえ、もとはそれぞれ別の語の連結したものであったと文法的に考えられる「だもの」という表現は相田みつをの中では一語として、単に理由を表すだけのものでもなく、また単なる甘えを表すだけのものでもなく、また単なる当然の意を表すものでもなく、人間を肯定的にとらえて寄り添うという、その思いを表現する最適の語であったと考えられる。

## 5. 「複合助辞(複合辞)」という考え方について

では、「だもの」という一連の語はどのように捉えたらよいのであろうか。文語文法では捉えられない口語の一面がここにも出ている。こうした一連の表現を「複合助辞(複合辞)」として捉えるという考え方がある。

「複合助辞(複合辞)」とは、「形式化した語や助詞・助動詞が複合して、一つの付属語のように機能する表現形式をいう。複合助詞と複合助動詞とに大別される。助詞相当語・助動詞相当語ともいう。」<sup>4)</sup>というものであり、本来別々の語が一つながりになって新たな意味を生み出している表現である。

たとえば「見えない」「わからない」という語は「見える」ことが「ない」、「わかる」ことが「ない」というように打ち消す動作の語がはっきりと分離され、二語であることがわかる。しかし、「～してはいけない」という表現の「いけない」や「～してはならない」という表現の「ならない」、または「～かもしれない」という表現の「しれない」という語は、「いける」ことが「ない」、「なる」ことが「ない」、「しれる」ことが「ない」というように分離させてしまうと意味をなさなくなる場合がある。

現在ではこうした一連の語を「複合辞」という考え方で取り扱おうという理論が脚光を浴びている。松木正恵は複合辞の用例について意味的分類を行い<sup>5)</sup>、(1)助詞性複合辞として①格助詞性複合辞 ②係助詞性複合辞 ③副助詞性複合辞 ④接続詞性複合辞 ⑤並立助詞性複合辞 ⑥終助詞性複合辞 (2)係助詞性複合辞として①禁止 ②義務・当然・当為・必然・必要・勧告・主張およびその否定 ③可能・不可能 ④許容・許可 ⑤意思・超意思 ⑥推量・推測・推定 ⑦適当・願望・提案・勧誘・勧告 ⑧要求・依頼 ⑨限定 ⑩程度 ⑪経験・回想・習慣 ⑫伝聞 ⑬行為の授受 ⑭アスペクト と細かく分類されている。

複合辞はその名の通り、「辞」的なものが集まった一つの表現方法であり、まとまって本来の語にはなかった意味をあらたに生み出す力を有している。

「だもの」という表現は松木が挙げた複合辞の例にはない。しかし、切り離すことができず、切り離せばその意味を失う語であるという点においても、私は「だもの」という語もまた、複合辞として捉えるべきだと考えている。

相田みつをもまた、口語を用いることでこうした表現効果を十分に活かすことができたのだろうと思われる。

## 6. まとめ

軽い反発や開き直りの気持ちをにおわせる表現である「だもの」という語をしいて単語として品詞分解するなら、断定の助動詞「だ」+終助詞「もの」に分解することができる。これは「だ」の代わりに「じゃ」「や」「です」といった語に置き換えられるうえに、「もの」が「もん」という表現に置き換えられることから納得できる。

しかしそれはあくまでも文法的に見た場合であり、「だ」と「もの」は一続きの言葉となって相田みつをの思いを表現しているのであり、切り離してしまっただけではその世界を表すことはできない。もちろん「だもの」という表現は相田みつをしか用いない、相田みつをだけの表現というわけではない。いちいち例を示すまでもなく、私たちが普段使用している表現形式である。それゆえ、これらは一つの意味を持った表現として捉えるべきであろう。そう考えるとやはり「だもの」は複合辞の一つとしてとらえるべきではないかと思われる。

このことについて先日、本学の佐竹秀雄教授から文法事項と表現形式は同一の視点でとらえるべきではないという御教示をいただいた。まったくその通りであり、そのためにも辞書などで「だ」と「もの」を分けて記述してしまっただけでは「だもの」の持つニュアンスが十分に証明されたとは言えないように思われる。

国語辞典では見出し語を自立語または付属語で立てているため、複合辞について見出しとして立ててはいないが、私は「だもの」を一つの見出し語として立てることは複合辞の働きを重視する観点から大いに賛成したいと考えている。その意味において、新潮社が別版で見出し語から削除してしまったのは残念に思っている。

追記 図1の相田みつをの書の転載については相田みつを美術館より快諾をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。

## 注

- 1 松村明『増補 江戸語東京語の研究』東京堂出版 1998 pp.142-168.
- 2 『相田みつを美術館公式ガイドブック』相田みつを美術館 2013 p.64.
- 3 『相田みつを美術館公式ガイドブック』相田みつを美術館 2013 p.89.
- 4 「複合助辞」『日本語学研究事典』明治書院 2007 p.221.
- 5 松木正恵「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要2』1990

## 引用辞書

「広辞苑 第七版」岩波書店 2018

「大辞林 新装第二版」三省堂 1999 なお、「第三版」(2006)においても同様であることを確認した。

「国語大辞典」小学館 1981

「改訂新潮国語辞典 一現代語・古語一 第二版」新潮社 1995



- 「角川国語大辞典」角川書店 1981  
「集英社国語辞典 第3版」集英社 2012  
「現代新国語辞典 改訂第六版」学研 2017  
「明鏡国語辞典 第二版」大修館書店 2010  
「例解国語辞典 第四〇版」中教出版 1976

## 引用文献

- 樋口一葉「たけくらべ」「にぎりえ」『明治文学全集 30 樋口一葉集』筑摩書房 1972  
有島武郎「一房の葡萄」『有島武郎全集 第6巻』筑摩書房 1981  
梶井基次郎「桜の樹の下には」『現代日本文学館 27』文藝春秋 1968  
幸田露伴「風流仏」『明治文学全集 25 幸田露伴集』筑摩書房 1968  
二葉亭四迷「浮雲」『日本文学全集 1』筑摩書房 1970  
田辺聖子「薔薇の雨」『薔薇の雨』新潮社 2010  
佐藤亮一 編『都道府県別全国方言辞典』三省堂 2009  
三遊亭円朝「怪談牡丹灯籠」『明治文学全集 10 三遊亭円朝集』筑摩書房 1965  
夏目漱石「虞美人草」『漱石全集 第三巻』岩波書店 1966  
宮澤賢治「銀河鉄道の夜」『宮沢賢治全集 7』筑摩書房 1985  
あまんきみこ「おしゃべりくらげ」『ふしぎなオルゴール』講談社 1985  
『新日本古典文学大系 19 源氏物語 1』岩波書店 1993  
太宰治「斜陽」『太宰治集 第九巻』筑摩書房  
太宰治「女生徒」『太宰治集 第二巻』筑摩書房 1975  
菊池寛「小公女」青空文庫電子データ <https://www.aozora.gr.jp/cards/001045/card4881.html>  
島崎藤村「ある女の生涯」『日本近代文学大系 14』角川書店 1970  
新美南吉「和太郎さんと牛」『新美南吉童話大全』講談社 1989  
相田みつを「弱きもの人間」『相田みつを ザ・ベスト にんげんだもの 逢』角川書店 2011  
相田みつを「泣」『相田みつを ザ・ベスト にんげんだもの 道』角川書店 2011  
相田みつを「七転八倒」『相田みつを ザ・ベスト にんげんだもの 逢』角川書店 2011  
相田みつを「ぐち」『相田みつを ザ・ベスト にんげんだもの 道』角川書店 2011

受稿日 2018年9月21日 受理日 2018年11月26日